秋の伝道礼拝第3回（10月22日）

永遠の命に至る水

龍口　奈里子

イザヤ書　第55章1節
ヨハネによる福音書の手紙　4章1～15節

今回の伝道礼拝のテーマは「永遠」です。人間は「有限」な存在であるのにもかかわらず、権力を持った時、最後に求めるのは「不老不死」です。つまり永遠の命です。中国の秦の始皇帝も最後に求めたのはこの「不老不死」だったと言われています。しかし「永遠」とは、そのようないつまでも存続する無時間的なものではないというのが聖書の伝える「永遠」です。人格的な存在であって、「永遠」の方から出会ってくださり、語りかけてくださる、それが聖書の伝える「永遠」なのです。

今日の新約聖書の箇所で登場する人はたった2人だけです。一人は、永遠の命を与えると約束された主イエス・キリスト。もう一人は、その永遠の命に至る水を与えられた女性です。重要な登場人物であるのに彼女には名前すらありません。ただサマリア地方の女性であること。彼女はこれまで、あまり幸せな人生を送ってきてはいなかったことがわかります。それだけの情報ですが、この場面には3つの大切な「謎」テーマが出てきます。

一つめは「サマリア人」であるということ。主イエスと弟子たちはユダヤから再びガリラヤに向かっていました。しかしそのためにはサマリアを通らなければいけませんでした。そこでイエスさま一行はシカルというサマリアの町のはずれまでやってこられました。しかしサマリアという場所は、主イエス自身も積極的に足を踏み入れようと思う場所ではなかったようでした「しかしサマリアを通らねばならなかった」（4節）。それは相手の女性にとっても同様でした。「ユダヤ人のあなたがサマリアの女のわたしにどうして水を飲ませてほしいと頼むのですか」（9節）。これが一つめの謎です。なぜサマリア人とユダヤ人は友好関係ではなかったのか。とくにユダヤ人がサマリア人を軽蔑し、嫌っていました。両者の対立は、王国が北と南に分裂した後、紀元前722年、北王国イスラエルが滅亡し、その都であったサマリアがアッシリアによって支配され、外国人たちがサマリアに移住するようになり、混血政策をとられたため、民族の純潔性を説くユダヤ人との間には深い溝と対立と差別が生じるようになりました。その現状からサマリア人の彼女は、主イエスから「水を一杯ください」と言われても半ば断るような言葉を発するしかありませんでした。

二つめの「謎」は彼女が主イエスの求めを拒んだのは、女性であったからでした。聖書に登場する女性は数にも数えられていませんでしたから、主イエスのたった一杯の水の求めにも断るような態度をとったのでした。

三つめの「謎」は、旅に疲れた主イエスが井戸のところで座り込んでおられたのが「正午ごろ」であったということです。そこに一人の女性が水がめをもってきました。水を汲むのは女性にとっては重労働のため、一番暑い時ではなく日が陰り涼しい時に水を汲む習慣であったはずです。わざわざ人に会わない暑い時間に水を汲みに来たのは彼女自身のこれまでの不幸な歩みと関係がありました。彼女には5人の夫がいたのに、今はまた別の人と暮らしているという現実がありました。サマリア人であること。女性であること。現実に苦しむ状況にあり、お互いに差別を受けているサマリアの女性たちの交わりからも外され、自らも交わりから離れ孤独であった。

この三つの「謎」のゆえに彼女は自分のはかなさを呪うか、あきらめるしかない現状にあり、自分自身の魂が飢え渇いていることさえ忘れているかのようでした。そんな生きる意味を失ってしまったかのような一人の女性に、主イエスは出会ってくださり、語りかけられます「決して渇くことはない」

「永遠の命に至る水」を与えようと宣言されるのでした。主イエスから一方的に出会ったのでは彼女の中の変化は生まれなかったでしょう。サマリアという境界線に足を踏み入れ、サマリアの女性に声をかけたのは主イエスからでしたが、この物語は2人の対話を通して徐々に彼女が変化します。だんだんとエネルギッシュに応答していったのは彼女の求めがあったからでした。サマリア人の名前のない女性という立場で、複雑な状況を持ちながら、彼女自身がいくつもの境界線を越えて、主イエスの方へと近寄っていき、求めていこうとする態度、それが彼女を大きく変えていくのでした。単純に言えば「生きていきたい」という願い、「渇かない永遠の命に至る水」を求めて生きたい。その信仰の原点を彼女は主イエスの中に見出して「命に至る水」がここにあるという信仰を求め始めるのでした。

主は彼女の変化に気づかれ答えられました。イエスは言われた。「この水を飲む者はだれでもまた渇く。しかし、わたしが与える水を飲む者は決して渇かない。わたしが与える水はその人の内で泉となり、永遠の命に至る水がわき出る」（13節）、10節では「その人」とだけ言われていたのに、13節ではっきりと「わたしが」と言われて彼女の求めを聞かれるのでした。そして、その言葉を受けて彼女は再び答えました。「主よ、渇くことがないように、また、ここにくみに来なくていいように、その水をください」（15節）。この物語はまだ続きますので、ここでは彼女は信仰の入り口に立っている程度かもしれません。

さて私たちはどうでしょうか。私たちも誰もが渇きがあります。私たちの魂は、尽きない泉を求めています。しかし、これを人間の側から得られるものと考えると、何か物質的なもので満たそうとします。ある人はお金であったり、ある人は名誉だったりするのです。しかし主は対照的に「わたしが与える水を飲む者は決して渇くことはない」と言われるのです。それは内側で泉となり、永遠の命の水が湧き出るのです。

サマリアの女性はやがて「命に至る水」を知ったときに、もう自分の持っている「水がめ」を一杯にしなくてよい、魂の渇きを満たそうとするような努力はしなくていいのだ。自分の器を大きく見せたり、あるいは逆に、わざと小さくみせて卑下するのではなくて、命の水につながっていれば、それによって、決して渇くことのない尽きない命、永遠に至る道があることを悟るのでした。最後に彼女は人々にこのように告白します。「さあ、見に来てください。わたしが行ったことをすべて、言い当てた人がいます。もしかしたら、この方がメシアかもしれません」（28節）。彼女は主イエスとの出会いを通して、永遠に尽きることがない泉を探すことができました。

昨年のクリスマスのバザーの時に、「サラーム」の活動を支援する製品（ペンケースやバッグなど）を買っていただきました。いわゆるパレスチナ刺繍と言われる手工芸で彼女たちは生計をたて、子供の教育資金などにしていました。彼女たちはイドナ村の女性たちです。イドナとはヨルダン川西岸にある村ですが、今回の戦争で残念ながら今は活動を休止中です。イドナ村からの知らせでは「西岸地区でも毎日のように殺されている人がいてたいへん憂鬱である。イドナ村から出る道路は2つありますが、ベツレヘムに向かう道が封鎖されてしまったため商品を発送することができなくなってしまった」そうです。こんな状況がしばらく続くでしょう。しかし、これで終わらないと信じます。彼女たちはここで生きる糧、尽きない命の道から、いつも力を得ているのでした。それは私たちひとりひとりが「永遠の命」につながって生きることであり、そこから受けた生きる糧、尽きない水を通して、隣り人の命を生かす道へとつながってゆく働きがあることを深く受け止めたいと思います。誰かの命のために働き、祈る、そのような存在として、それぞれの役目を担ってゆきたいと思います。

（出席・35名。文責・編集委員会。要約担当・菅野静恵）